

大学進学における ジェンダーギャップ白書

平等な学びの機会確保のために

 #YourChoiceProject

大学進学におけるジェンダーギャップ白書

目次

はじめに 1

第1章 現状 3

1-1. 日本の大学進学率におけるジェンダーギャップは大きい 3

1-2. 都道府県別大学進学率における男女差 3

1-3. 難関大学の女子比率 4

1-4. 学部別の女子比率の偏り 6

第2章 社会全体のステレオタイプ 7

2-1. 男性は働いて、女性は家事をするものであるというステレオタイプ 7

2-2. 年収に関するステレオタイプ 9

2-3. 学問分野に関するステレオタイプ 9

第3章 家庭の問題 11

3-1. 教育投資における男女差 11

事例の紹介 12

3-2. 地元外進学に関する男女差 12

3-3. 資格取得傾向 13

事例の紹介 14

第4章 学生に内在化されたステレオタイプ 15

4-1. 高校生に見られるジェンダー・ステレオタイプ 15

事例の紹介 16

4-2. 自己評価の低さ 16

4-3. ロールモデルの欠如 17

4-4. 浪人率における男女差 18

第5章 学校・塾の問題 19

5-1. 学校の問題 19

5-1-1. 進学校の男女差 19

5-1-2. 高校の設備における男女差 21

5-2. 進学塾の問題 22

事例の紹介 22

第6章 大学の問題 23

6-1. 大学教員の男女差 23

6-2. 大学におけるハラスメント被害 24

第7章 その他の問題 25

7-1. 生理について 25

7-2. 大学学生寮について 26

7-3. 学校教員の男女比について 27

7-4. 隠れたカリキュラムについて 28

おわりに 29

参考文献 30

はじめに

本白書は、特に大学や学問分野ごとの女子学生の偏りへの問題意識から出発し、進路選択におけるさまざまなジェンダーギャップについて、社会全体・家庭・教育機関など多様な観点から包括的な説明を試みたものである。教育分野のジェンダーギャップについて包括的にまとめた文書は少なく、この問題について初めて知ろうとする人や実際に行動に移す際の議題整理・最初の一步として本白書を参照していただけたら幸いである。

全体の構成として、まず日本の教育分野におけるジェンダーギャップの深刻さを第1章「現状」で確認し、その原因と考えられる問題について第2章「社会全体のステレオタイプ」第3章「家庭の問題」第4章「学生に内在化されたステレオタイプ」第5章「学校・塾の問題」と、学生を取り巻く環境と学生自身の意思決定の相互作用に着目し概説する。また第6章「大学の問題」では多様な学生を包摂するための進学後の環境整備から、第7章「その他の問題」では、以上の章では扱えなかった複合的な要素についての問題提起を行う。

本白書の作成にあたって、一般に公開されている書籍や研究、行政機関のデータをはじめ、40人程度の学生に定性インタビューを実施し、【事例】として紹介している。数字や理論の裏にいる学生の実際の声や経験を通じて、問題の現在性を感じていただけたらと思う。

本白書の課題として男女二元論的な説明に終始している点に留意されたい。本来的には男女二元論にとらわれない教育の機会平等が問題とされるべきところ、男子学生・女子学生という社会的に割り当てられたジェンダーによって生じる彼ら彼女らの間の現状の不平等を可視化するため、あえて男子学生・女子学生といった言葉を用いている。特に性的マイノリティを取り巻く教育環境には、より深刻な差別や課題が現存していることを忘れてはならない。

専門家によるコメント



及川 美紀

宮城県石巻市出身。東京女子大学文理学部卒。
1991年株式会社ポーラ化粧品本舗（現株式会社ポーラ）入社。子育てをしながら30代で埼玉エリアマネージャーに。12年に執行役員、14年に取締役就任。20年より24年同社代表取締役社長。リブランディングを実現し、誰もが自分の可能性をひらくことができる社会をミッションに、パーパス経営・ダイバーシティ経営を牽引。24年末退任。
2021年よりダイアログ・ジャパン・ソサエティの理事に就任。

「自分の限界を設定しないで下さい」女子学生に向けた言葉に衝撃をうける。そんなつもりはないのに「限界を設定している」女性たちがまだいるのである。無意識に限界を設定している背景には「親や社会による刷り込み」「情報の壁」「ロールモデルの不足」「自己評価の低さ」などがあるという。令和の時代なのに、である。私が大学進学を志した昭和61年、地方の女子高生だった私は情報不足、親の出す条件、金銭的状况に阻まれていた。実はその後40年たっても地方の女性の前にそびえる壁は変化していない状況に愕然とする。個人の選択が本人に責任のない属性によって制限されてしまっている。その壁は一日も早く取り除きたい。実は「限界の設定」は社会人になっても管理職登用を断る女性たちとして重くのしかかる。学生時代に「限界を突破する経験をする」「思い込みで判断しない」「ロールモデルに出会う」ことで将来のビジネスでの可能性も開くことができると期待する。YCPの丁寧な調査は壁の原因をロジカルに紐解き、「自分と周囲の思い込み」からつくりだされる限界の壁を壊すきっかけとなるだろう。東大受験のみならず様々な機会にチャレンジする人を増やすために。



中野 円佳

東京大学多様性包摂共創センター DEI共創推進戦略室 准教授
東京大学教育学部卒、日本経済新聞社、フリージャーナリストなどを経て、2024年6月より現職。
立命館大学大学院先端総合学術研究科修士号（学術）、東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。
近著に『教育にひそむジェンダー』（ちくま新書）。

YCPの調査は経験談に裏打ちされていて、今回の白書でも事例などから今の大学生がまだこんなに男女差別に直面しているのかということに驚かされる。その「驚く」という行為自体が、「驚く」側の自分はいかに特権を持って生きてきたかということを教えてくれる。「2020年代の日本で、男女差はそこまでないはずだ」と思い込むことができるかどうか、産まれた家庭・地域・性別などによって左右されているわけだ。拙著『教育にひそむジェンダー』（2024年、ちくま新書）でも記したが、大人たちの様々な言動にバイアスはまぎれており、こういったことに気付かせてもらうためには、この白書のように可視化をすること、何度でも発信することが非常に重要だ。教育社会学でも進学行動についての調査研究がされてきたが、YCPが大学名を絞って焦点を当てた貴重な調査や独自の視点を持って調査や発信を進めてくれていることを心強く感じている。

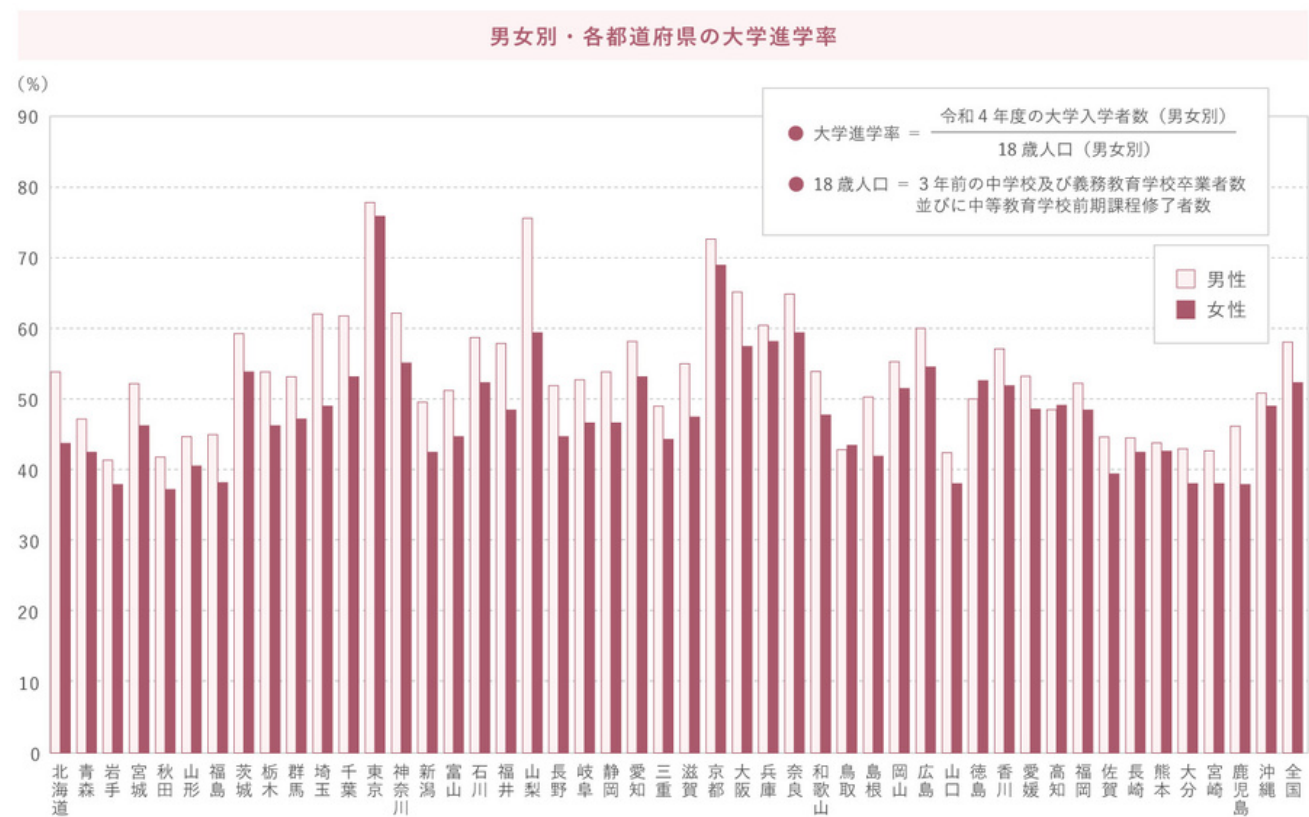
1. 現状

1-1 日本の大学進学率におけるジェンダーギャップは大きい

日本のジェンダーギャップについて議論する時、例年Global Gender Gap Reportにより報告されている数値や順位が取り上げられることが多い。そこでは、政治・経済分野でのジェンダーギャップばかりが取り沙汰され、一見教育分野のジェンダーギャップは是正されているかのように感じる。しかし、2023年以降大学進学率の男女差が加味されたことから、前年の1位から大きく順位を落とし、47位という結果になり、2024年では72位となった(参考文献1)。

今回話題としている大学を含む高等教育についてのみ注目すると、日本の順位は107位と、かなり深刻なギャップを抱えている。

1-2 都道府県別大学進学率における男女差

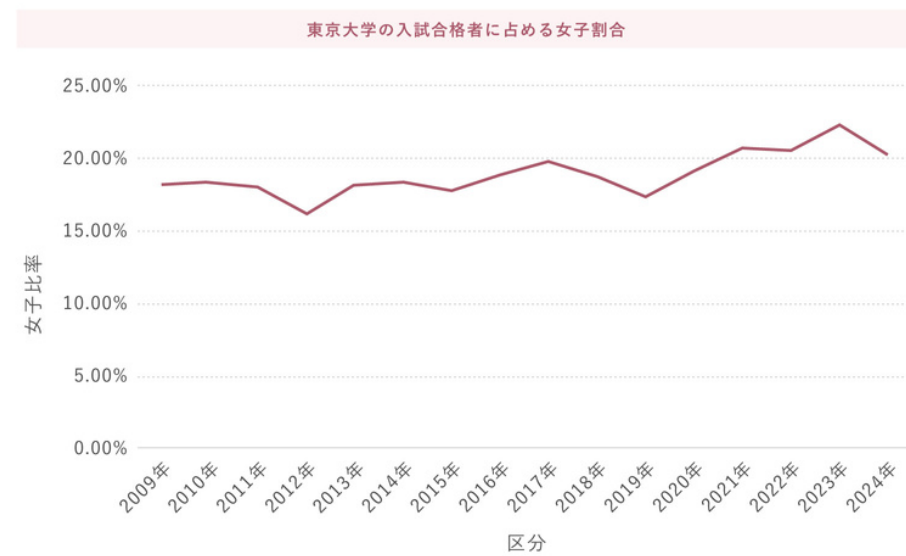


出典：文部科学省. (2023, September 25). 中央教育審議会総会(第137回)【資料1-3】参考資料

左下のグラフは、文科省のデータにより各都道府県の大学進学率を男女別に比べたものである。青色が男性の大学進学率、赤色が女性の大学進学率であるが、10ポイント以上の差がある県が3、5ポイント以上の差がある県が31と、事態はかなり深刻である。また、女性の大学進学率において、最大の東京都が76.0%なのに対し、最低の宮崎県では38.0%であり倍の差があることも、地域差を物語っている。

1-3 難関大学の女子比率

また、特に大学進学におけるジェンダーギャップはいわゆる「難関大学」においてさらに顕著である。東京大学で「2割の壁」と呼ばれて久しいように、女子比率の低さは長らく東京大学内で問題視されてきた。当初、2020年までに女子比率3割を達成することが数値目標として掲げられていたが、2023年度の女子比率は22.5%、2024年度に至っては、20.6%と伸び悩んでいる。



出典：東京大学新聞. (2024, March 10). 東大24年度一般選抜、2993人合格 春合格の女性割合は減少の20.6%.

一方で、女子比率が伸び悩んでいるのは東京大学だけではない。「難関大学」と呼ばれる、旧帝国大学、東京工業大学、一橋大学について、2023年度における入学者の女子比率は表の通り。

難関大学の女子比率			
	総勢	女子人数	女子比率
北海道大学	2,544	742	29.2%
東北大学	2,444	723	29.6%
東京大学	3,124	704	22.5%
東京工業大学	1,101	118	10.7%
一橋大学	1,006	281	27.9%
名古屋大学	2,149	714	33.2%
京都大学	2,894	699	24.2%
大阪大学	3,323	1,229	37.0%
九州大学	2,612	833	31.9%

出典：大学改革支援・学位授与機構.大学基本情報 2023（R5）

どの大学を見ても4割を超える大学はなく、3割を超えているのも9校中3校にとどまる。

このように、難関大学における女子比率の低さは、日本の難関大学全体として早急に取り組まなければならない課題と言える。

1-4 学部別の女子比率の偏り

前述の通り、大学全体での女子比率の低さもさることながら、学部別の女子比率の大きな偏りも問題視されている。下の表は、2023年度学校基本調査に基づいて作成したものである。特にSTEMと呼ばれる理系分野において女性の割合が顕著に低く、その差は看護学や家政学、人文科学と比較すると歴然だ。

これには、「女性は理系に向いていない」などの学問分野についてのステレオタイプが大きく影響していると考えられる(後述)。

学部別の女子比率	
区分	女子比率
人文科学	64.3%
社会科学	36.7%
工学	16.1%
農学	46.1%
保健（計）	63.5%
└ 医学	37.3%
└ 歯学	43.8%
└ 薬学	61.7%
└ 看護学	90.7%
商船	16.1%
家政	90.4%
教育	59.2%
芸術	68.5%

前述の通り、文系の学部に比べて理系学部は女子比率が少ないが、その例外として医学や歯学、薬学があげられる。これらの学部は全て、将来医師、歯科医、薬剤師などの資格を持って安定して働き続けることができる職業と密接に関連している。女性が特に資格を取得しようとする傾向にある点については、「3-3 資格取得傾向」の章を参照されたい。

出典：文部科学省. (2023, December 21). 学校基本調査－令和4年度 結果の概要－

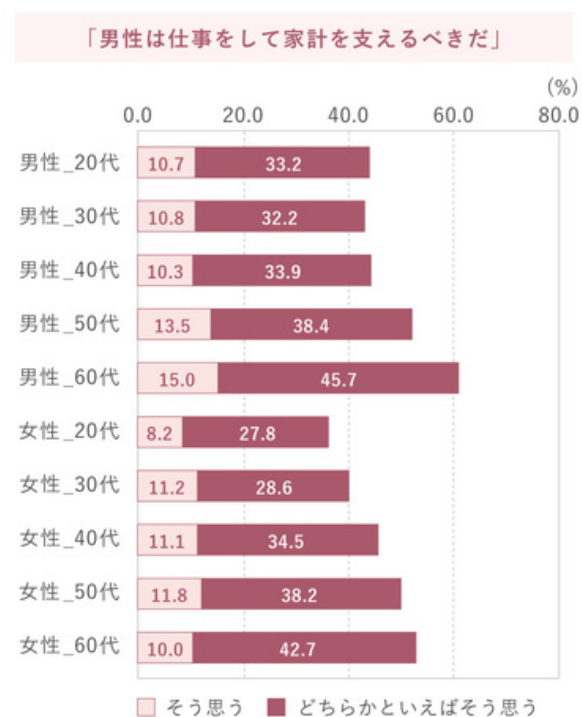
2. 社会全体のステレオタイプ

特に女子学生の自由な進路選択を阻害しているのが、社会全体に共有されている「ステレオタイプ」である。ステレオタイプとは、「特定の集団に所属する人々や、特定の属性を有する人々に関する過度に一般化された信念」のことである。このステレオタイプから派生した、「女性は男性よりも勉学に向いていない」「男性は女性よりも家事に向いていない」など、事実に基づかない思い込みを「バイアス」という。（参考文献6）

令和4年度の内閣府男女共同参画局の調査によると、「女性は感情的になりやすい」「育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない」といった多くのバイアスが根強く残っていると指摘されている。（参考文献7）

ここでは、特に進学意識に影響を与えるステレオタイプ・バイアスについて紹介する。

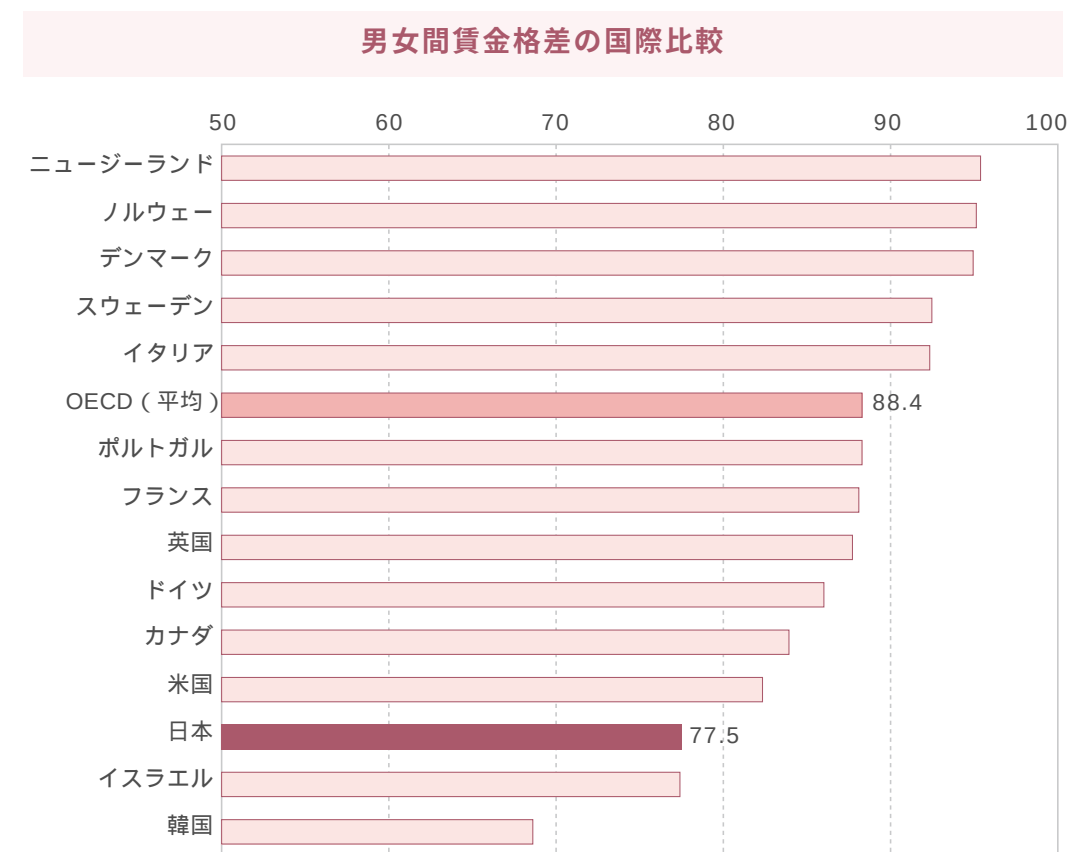
2-1 男性は働いて、女性は家事をするものであるというステレオタイプ



出典：男女共同参画局. 令和4年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究.

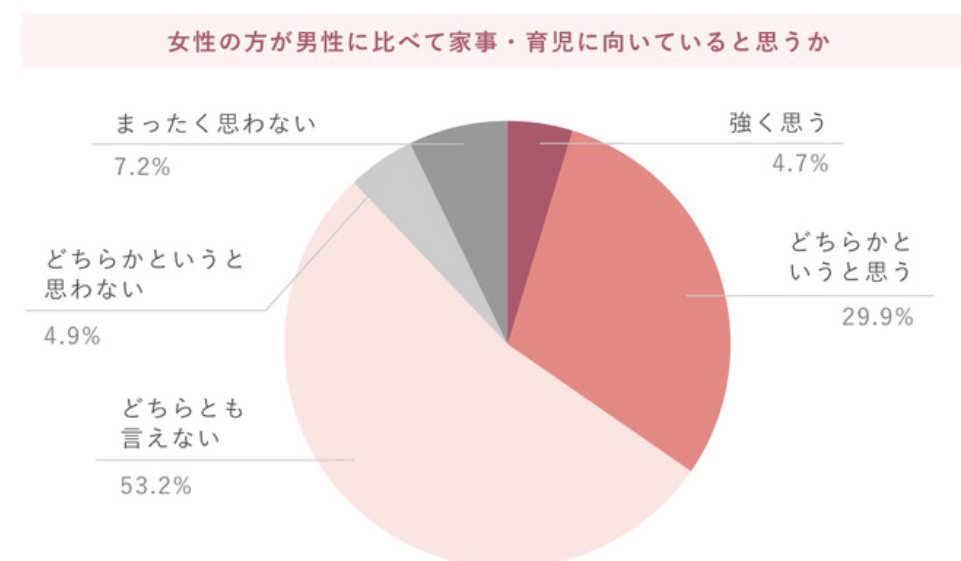
令和4年度「性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」によると、「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」という項目に対して「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は、男女ともに40%以上と非常に高かった。また、この傾向は年代が高いほど強かった。

男女間賃金格差が大きいのも、このようなステレオタイプを強化する一因となっているだろう。日本の男女間賃金格差は縮小傾向にはあるものの、諸外国と比較すると著しく深刻で、令和2（2020）年の男性一般労働者の給与水準を100としたときの女性一般労働者の給与水準は77.5となっている。



出典：男女共同参画局. 男女共同参画白書 令和4年版. 2-12図 男女間賃金格差の国際比較

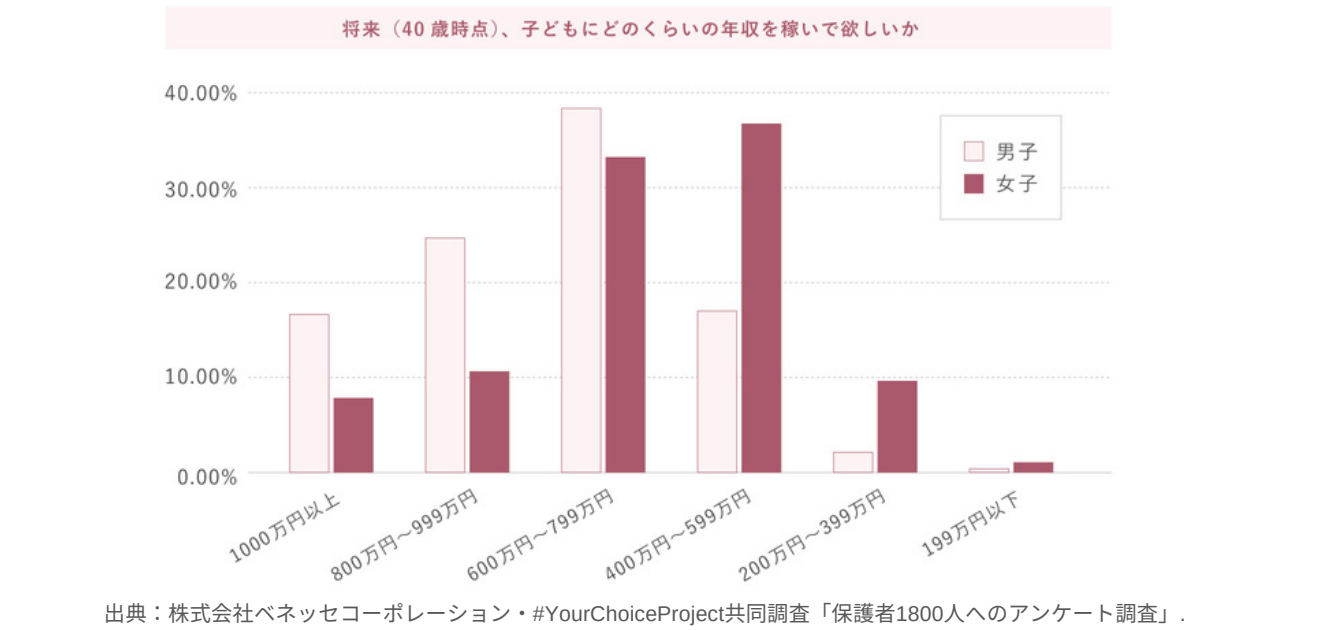
また、令和6年度「保護者1800人へのアンケート調査」によると、「女性の方が男性に比べて家事・育児に向いていると思うか」という設問に対して「強く思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した割合は35%と高く、「どちらかというと思わない」「全く思わない」と回答した割合は12%にとどまった。



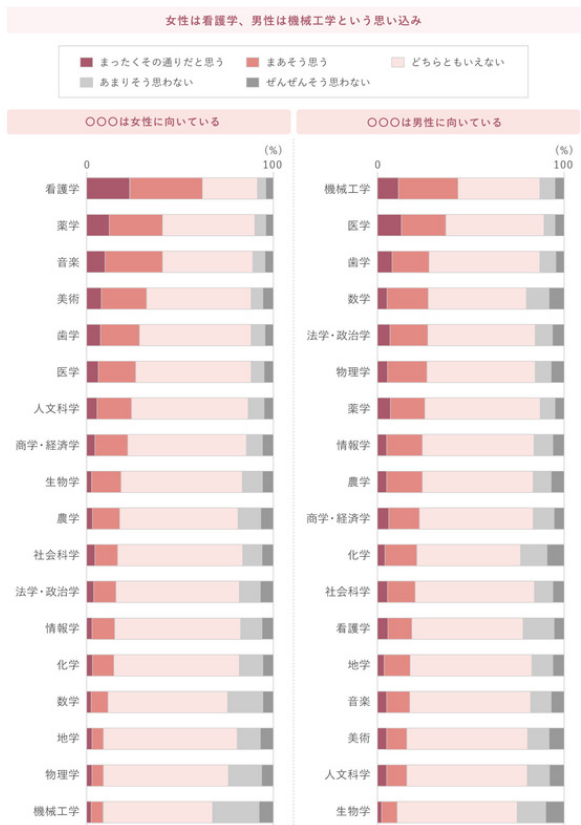
出典：株式会社ベネッセコーポレーション・#YourChoiceProject共同調査「保護者1800人へのアンケート調査」

2-2 年収に関するステレオタイプ

令和6年度「保護者1800人へのアンケート調査」によると、「子どもに将来どのくらいの年収を稼いで欲しいと思うか（40才ごろを想定）」との設問に対して、男子学生は平均772万円、女子学生は平均634万円と、男子学生の方がより稼いで欲しいと思われている。



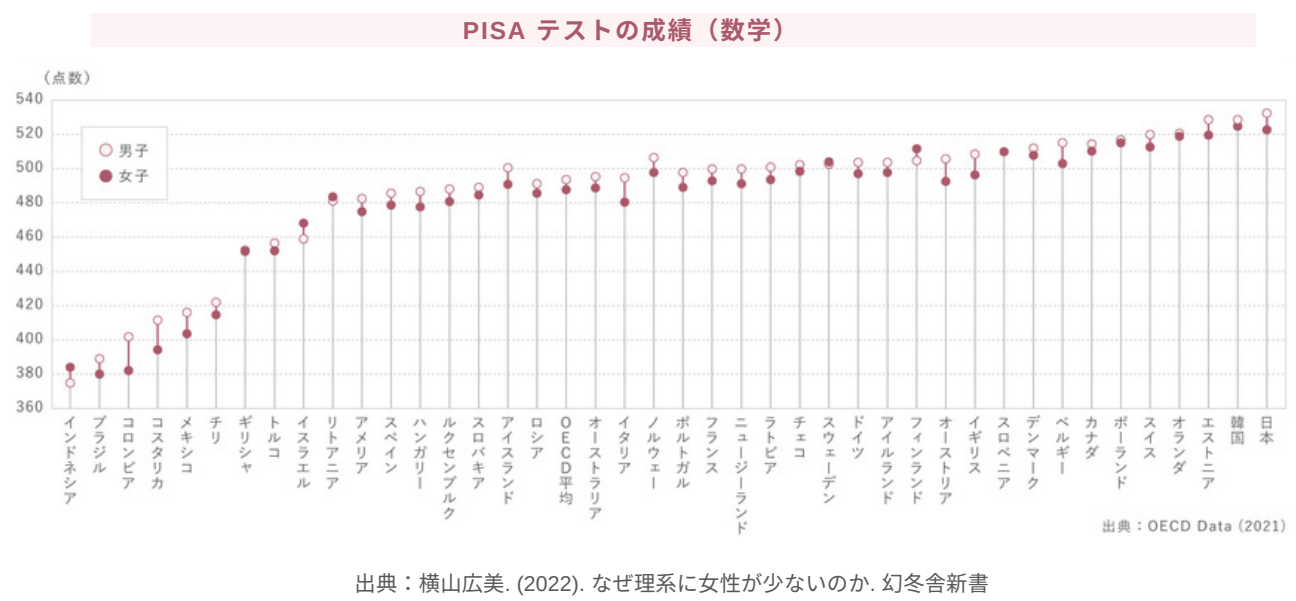
2-3 学問分野に関するステレオタイプ



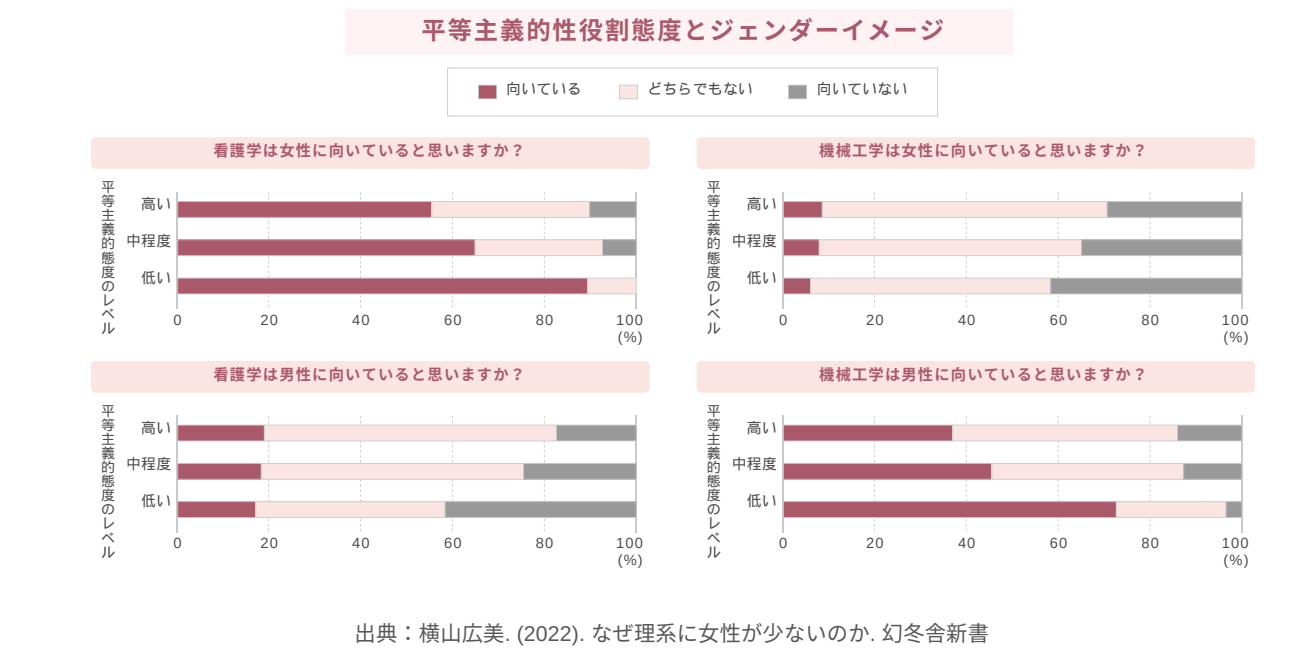
学問分野に関しても、女性と男性で「向いている」「向いていない」といったステレオタイプが存在する。調査によると、看護学・音楽・人文科学などが女性に向いていると思われる一方で、機械工学や数学などは男性に向いていると思われている。

もちろん、特定の学問が性別によって向いている・いないなどはあるはずもなく、学問に対するジェンダースtereotypeだと言える。

数学などは、一般的に女子学生が男子学生に比べて苦手であると言われることが多いが、これは性差よりも個人差が大きいということが、これまで複数の研究で指摘されてきた。(参考文献9)15歳の男女が受ける国際学力テストPISAの数学分野では、日本の学生は男女ともに世界トップクラスである。たしかに、日本では男性のほうが僅かに平均点は高いものの、諸外国を見ると女性の方が高い国やその差が僅かな国も存在する。性別による生来的な差よりも、環境要因の方が大きいことは明らかであろう。



また、このような学問に対するジェンダースtereotypeは、一般的なジェンダー平等度（平等主義的性役割態度スケール短縮版を用いて測定）が低い人ほど強く持つ傾向がある。



3. 家庭の問題

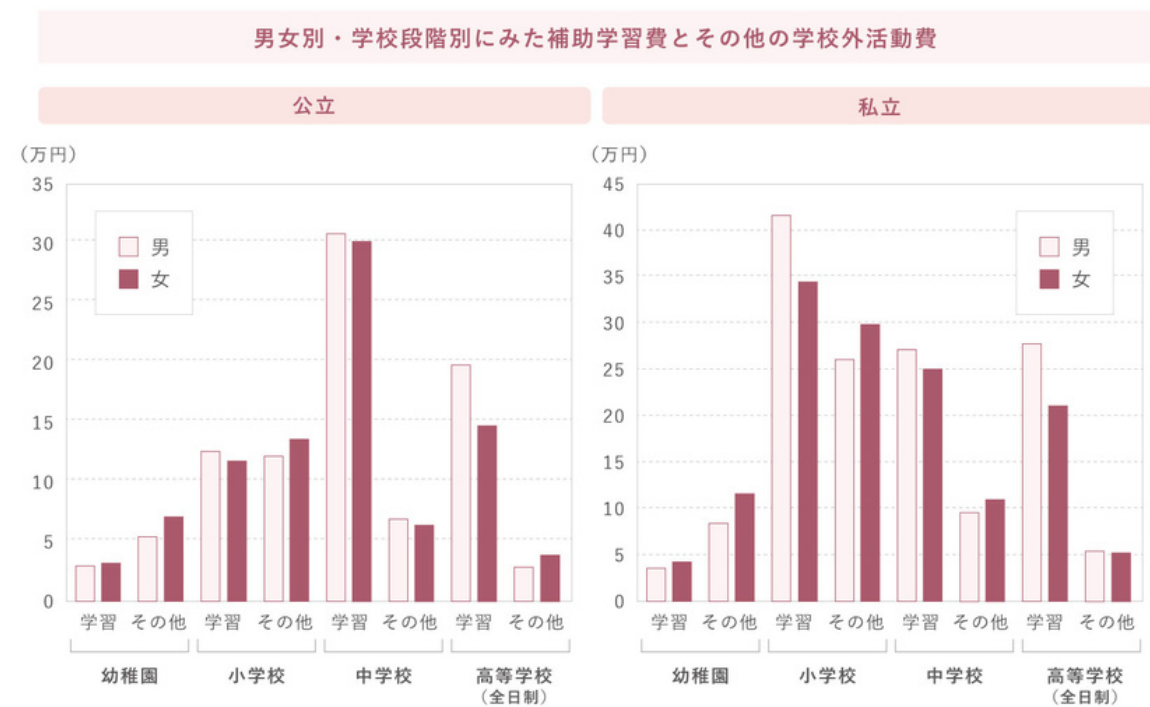
進路選択に関して、家庭の影響は非常に大きい。大学の学費・生活費・通塾費等、勉学にかかるお金は膨大であり、「親がどの程度お金をかけられるか」によって子どもの選択肢の幅は大きく左右される。この章では、親のジェンダーステレオタイプ・バイアスによって子どもが受ける影響について概括する。

3-1 教育投資における男女差

令和3年度内閣府委託調査「女性生徒等の理工系分野への進路選択における地域性についての調査研究」によると、進路選択時に経済面を考慮する女性は男性よりも多いことから、特に女子学生の進学の選択肢に親の意向が与える影響は大きいことが伺える。

文部科学省が実施した「令和3年度子どもの学習費調査」によると、通塾などの学外学習にかかる「補助学習費」は、小学校・中学校・高校の各段階において、男子の方が金額が高くなっている。例えば、全日制公立高校の男子の補助学習費の平均が196900円なのに対して、女子の補助学習費の平均は145614円で、およそ5万円程度の違いがある。

一方で、補助学習費以外の「その他の学校外活動費」は概ね男子よりも女子で高い。芸術系の習い事への支出は、有意に男子よりも女子に対して多いことも示されている。



出典：文部科学省、「令和3年度子どもの学習費調査」（2022年）

事例の紹介

福岡県出身のCさんの家庭には、強いジェンダーステレオタイプが蔓延っていて、保護者からの教育投資には男女で大きな違いがあったと言う。

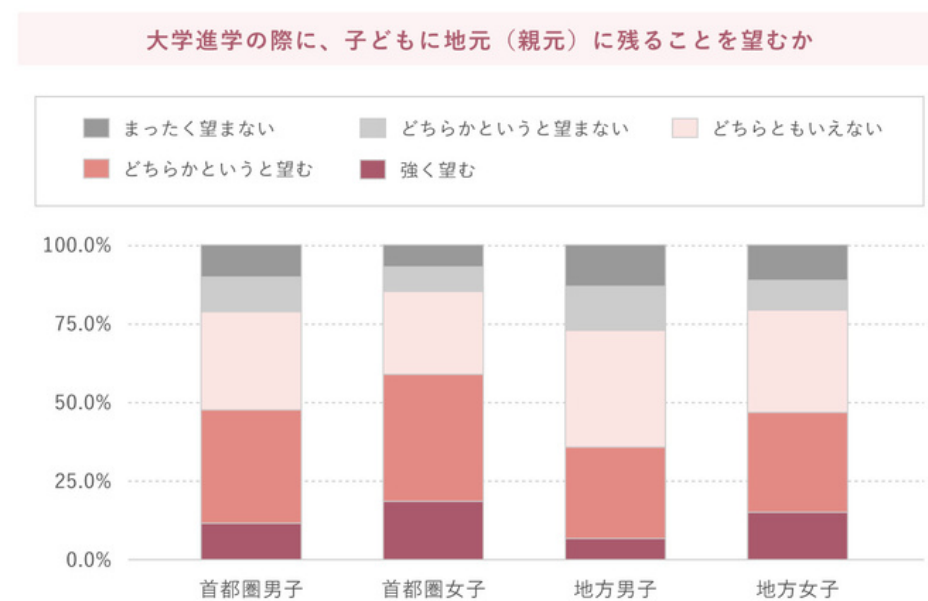
Cさんには2つ上の兄と、2つ下の弟がいる。兄と弟は、中学から進学塾に通っていたが、Cさんが「塾に通いたい」と訴えても、「自分でなんとかしなさい」と聞き入れられなかった。Cさんの兄は首都圏の私立大学薬学部に進学したが、Cさんは「女子に学費はかけられない」と言われて私立大学および地元外への進学や浪人を一切禁止されていた。

出典：光文社新書「なぜ地方女子は東大を目指さないのか」

3-2 地元外進学に関する男女差

地元外の大学への進学に関しても、男女間でそのハードルは異なる。

令和6年度「保護者1800人へのアンケート調査」によると、男子よりも女子の方が、大学進学時に地元（親元）に残ってほしいと思われている。



出典：株式会社ベネッセコーポレーション・#YourChoiceProject共同調査「保護者1800人へのアンケート調査」

また、このような保護者の思いを内在化し、女子学生自身においても、地元志向がみられる。

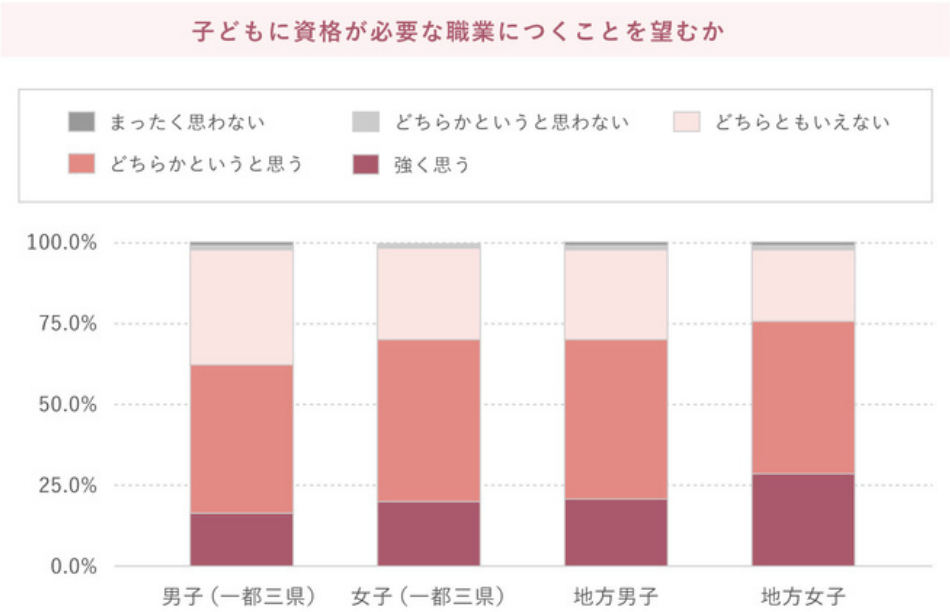
弊団体による「なぜ地方の女子学生は東京大学を目指さないのか【2023年度調査】」（以下、#YourChoiceProject2023調査）によると、大学選びにおいて重視するポイントを順位づけしてもらい、その重みづけを行なったところ、地方女子は地方男子に比べ、有意に「実家に近いこと」を重視する。また、地方女子が実家からの近さを重視する度合いは、保護者からの期待度に影響を受ける。

日本にある大学の25%が東京都内に集中していること、東京都と京都府以外では各県の大学入学定員はその県の18才人口よりも少なく、多くの県では50%未満となっていること（参考文献13）を考えると、地方在住者にとって地元外進学という選択肢の有無は高校卒業後のキャリアに大きく影響するだろう。

3-3 資格取得傾向

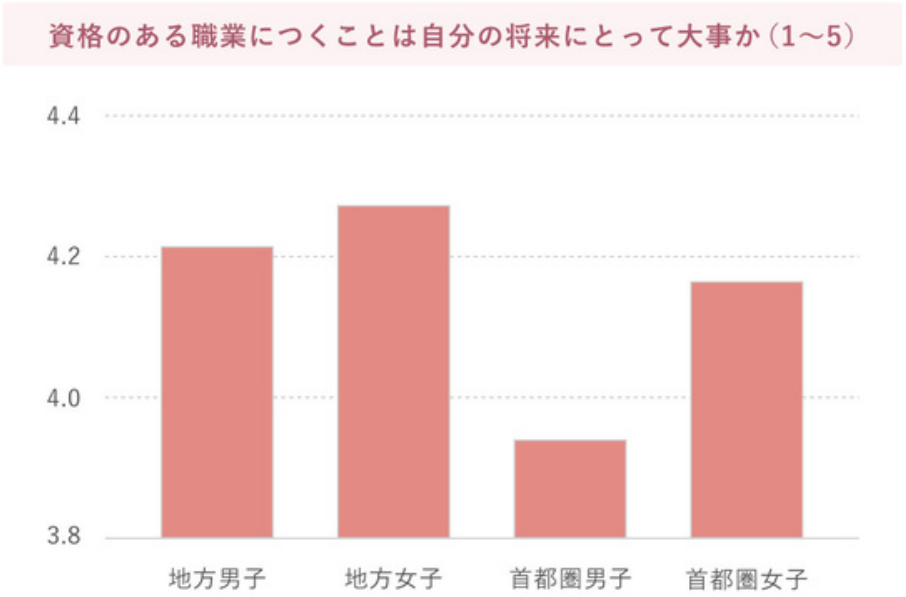
保護者の「女性であれば、子育ての段階で離職するだろう」といったステレオタイプの影響として考えられるのが、女子学生が顕著に資格が取得できる学部を選択する傾向である。

令和6年度「保護者1800人へのアンケート調査」によると、「子どもに、資格が必要な職業についてほしいと思うか？」という設問では、男子より女子、一都三県よりそれ以外が、資格が必要な職業についてほしいと思われている。



出典：株式会社ベネッセコーポレーション・#YourChoiceProject共同調査「保護者1800人へのアンケート調査」

また、#YourChoiceProject2023調査によると、「資格のある職業につくことは自分の将来にとって大事だと思うか」という設問に対する回答から、男子より女子、首都圏より地方の方が資格のある職業を目指す傾向が強い。



出典：#YourChoiceProject. なぜ、地方の女子学生は東京大学を目指さないのか【2023年度調査結果】

事例の紹介

兵庫県の高校に通うある女子学生は、実際に「出産とか結婚で一旦仕事を辞めざるを得なくなった時に、資格を持っていた方が再就職しやすいのではないか」と、親から言われたと語っている。この女子学生は、当初看護師志望であったが、高校での経験を経て理工系分野へと志望学部を変更した。当初の「看護師」という志望について、「私の中で資格だと、医者、看護師、薬剤師ぐらいしか知らなくて、自分がその三つの中で合うのは看護師かなっていう。ただ、その考えで決めてました。」と語っている。

このように、「女性は仕事をやめて育児に専念するものである」といったステレオタイプと、復職しやすい職業選択肢への知識の無さが相まって、女子学生の顕著な医薬系学部選択傾向が生まれていることが伺える。

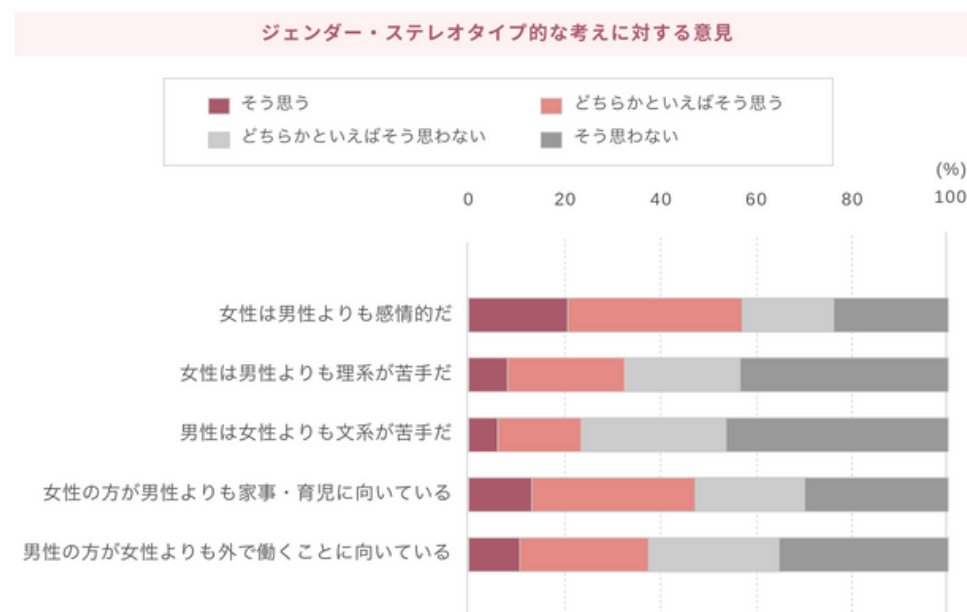
4. 学生に内在化されたステレオタイプ

セクション2であげたようなジェンダーステレオタイプ・バイアスは、家庭や学校の間を通じて、学生自身に内在化される。例えば、ある研究によると、「賢い」とことと「男性」を結びつける傾向は、男児で特に強く、7歳頃から顕著に見え始める。また、女兒はその代わりに4歳から、自分の性別に「優しさ」という特性を押しつけ始める。(参考文献14)

この章では、学生自身がどのようなジェンダーステレオタイプを持っているかについて詳説する。

4-1 高校生に見られるステレオタイプ

特に大きな進路選択を迫られるような高校生においても、女子の進路選択を阻むようなステレオタイプが内在化されている。公益財団法人プランインターナショナルによる高校生を対象とした調査によると、「女性は男性よりも理系が苦手だ」という項目に対して、約32%の学生が、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」と回答している。また、「女性の方が男性よりも家事・育児に向いている」という項目についても、約48%の学生が、「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」と回答している。



出典：Plan International 「日本の高校生のジェンダー・ステレオタイプ意識調査」

また、「女の子」「男の子」という言葉から思い浮かぶ言葉についても、学生自身がジェンダーステレオタイプを内在化し、「女の子」と「かわいい、化粧、おしとやか」といった言葉を連想し、「男の子」と「カッコいい、筋肉、仕事」などを連想している。見た目についてのステレオタイプや性役割分業意識が内在化されていることが伺える。(参考文献15)

事例の紹介

愛知県に住むある女子学生は、弊団体によるアンケートの項目「女性の方が男性よりも家事・育児に向いている」に対して、「とてもそう思う」と回答した。彼女に詳しく話を聞くと、「実際に今、女性の方があんまり仕事をせずに家に帰って、男性は長く働くっていうのがあるなっていうふうに思うので。(中略)そういうのがあると、私も家事をしなきゃって思う」と、現状の不均衡が自身の価値観に影響を与えていると回答した。

また、「親にも（家事を）私は頼まれるけど、弟は頼まれない」と、家庭内において性役割分業意識が内在化されていく様子が見受けられた。

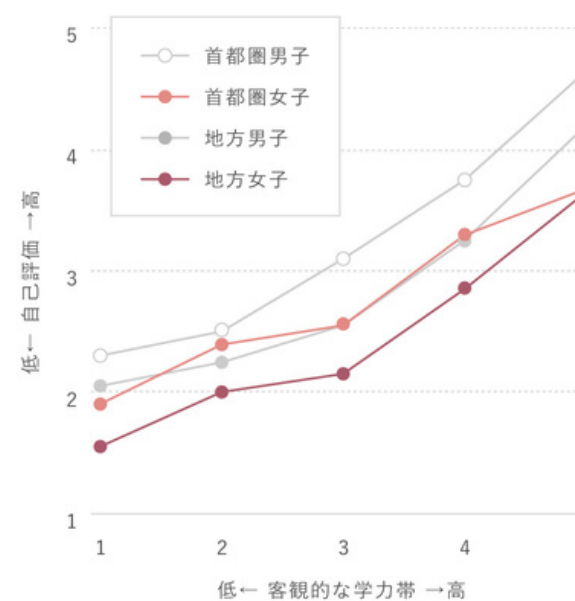
彼女は、そのような分業に違和感を覚え、保護者に問いかけたところ、平等な分担へと変化したと言う。保護者自身も無意識のうちに、娘と息子に別の役割を期待しているのではないだろうか。

彼女のように「弟は家事を頼まれない」という現実直面することで、無意識のうちに「女性は家事・育児に向いている」といった社会的期待が内在化され、進路選択においても「女性として果たすべき役割」があるのではないかと考える傾向が生じる。たとえば、進学先や専攻を選ぶ際に、家庭や育児と両立しやすい職業や、将来的に仕事を辞めても再び復帰しやすい分野を選びがちになるといった影響が考えられる。

4-2 自己評価の低さ

このようなステレオタイプを内在化した影響か、特に地方の女子学生は、合格可能性に関する自己評価が極めて低い傾向にある。

客観的な学力帯と東大合格に対する自己評価の関係



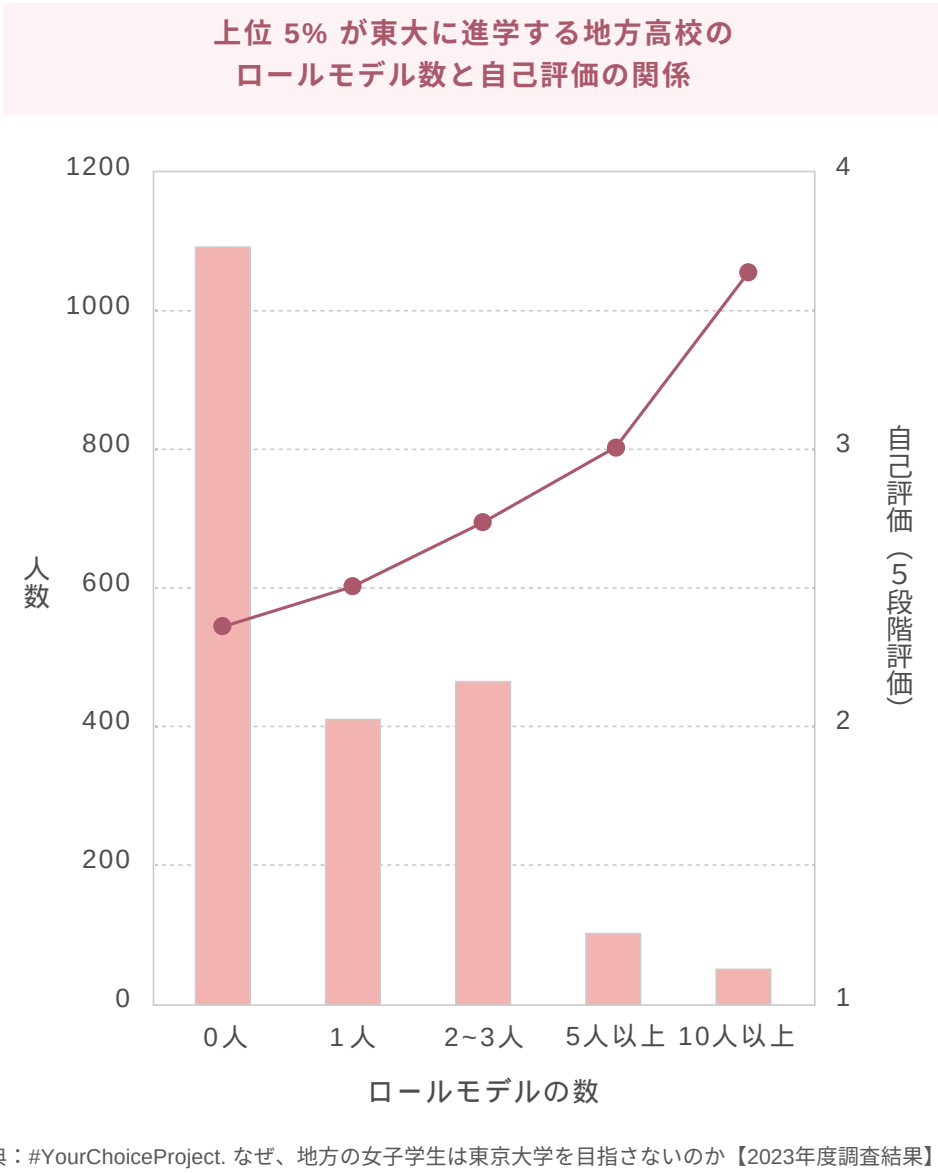
出典：#YourChoiceProject. なぜ、地方の女子学生は東京大学を目指さないのか【2023年度調査結果】

#YourChoiceProject2023 調査によると、同じ「客観的な学力」帯の人では、地方女子が首都圏女子・地方男子に比べ、自分が東京大学などの難関大学に努力をすれば合格できると思うか、という自己評価が著しく低いことがわかった。（「客観的な学力」は、二項目「自分の成績は学年の中でどれくらいだと思うか」「自分の高校にいる人で、東大に入学できる可能性が高い人は上位何%以上の人だと思うか」から割り出したものである。）

4-3 ロールモデルの欠如

ロールモデルとは、一般的に「成功への動機づけと道筋を提供する、同一化と学習の対象となる手本である人」などと表され、キャリア選択や進学選択に関して、学生の行動や意思決定に影響を与える存在である。（参考文献16）女性社員のキャリアプランに関して、ロールモデルの存在が重要であることはかねてから指摘されてきたが、この「ロールモデル」となるような様々な大人・先輩が周囲にいるかいないかによって、学生の進路選択の幅も大きく異なるだろう。

#YourChoiceProject2023調査によると、高校生にとって、東京大学に合格したロールモデルの人数が多いほどその大学への合格可能性に関する自己評価が高くなることがわかっている。



前述したように、難関大学や理工系学部に進学している女性は著しく少ない。このようなロールモデルの欠如が、女子学生の進学意欲に悪影響を与えている可能性も大いに考えられるだろう。

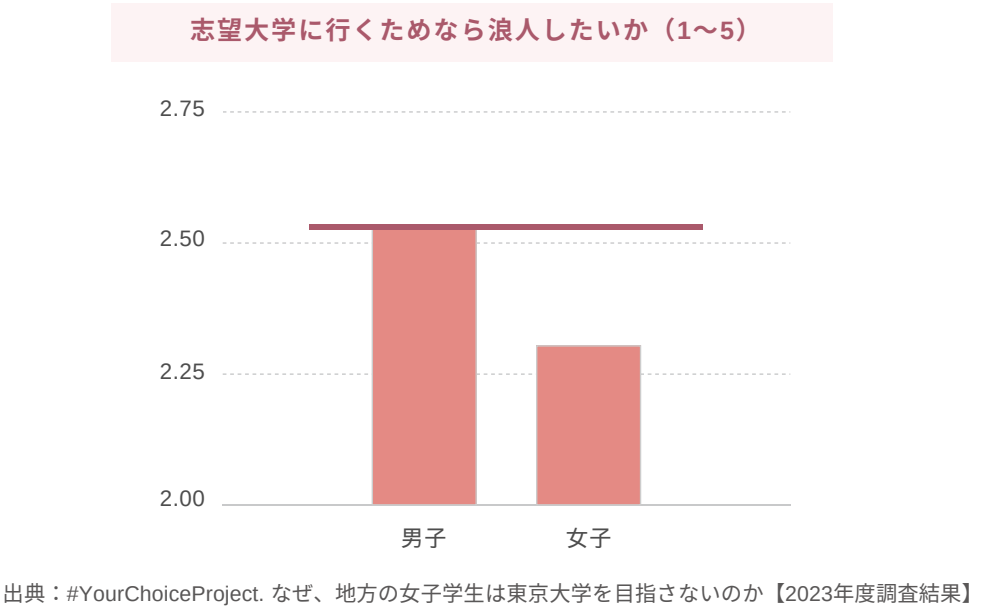
4-4 浪人率における男女差

大学入試において、志望校に合格できなかった場合など卒業後、志望した学校に入学せず、次年度の試験に備えることを浪人というが、この浪人率においてもジェンダーギャップが顕著である。

経済的な観点からの親の現役合格の圧力が高いこと(3. 家庭の問題参照)や、社会人になる、結婚・出産などのライフステージにおいて女性が遅れをとることを過度に懸念する風潮が影響し、浪人回避の傾向が女性において高いことが指摘されている。

#YourChoiceProject2023調査では、「自分が志望する大学に行くためなら浪人したいと思うか」（浪人肯定度）の設問において女子と男子の間に有意な差が検出された。

以上から、実際に女子は男子に比べて浪人を回避しようとする傾向があることがわかる。



実際2023年度学校基本調査をもとに、年齢別大学入学者数から、19歳を一浪、19~20歳を二浪まで、19~21歳を三浪までとして入学者数に占める割合を算出した。一浪時点で、女子と男子には4.2ポイントもの差があり、二浪になると5.2ポイントまでひらくことが分かった。この浪人回避傾向が、女子学生の志望校を押し下げている可能性が考えられる。

男女別・大学入学者数に占める浪人生の割合		
	男	女
一浪	16.99%	12.73%
二浪まで	19.21%	14.01%
三浪まで	20.00%	14.55%

出典：文部科学省. 2023年度学校基本調査より著者作成

5. 学校・塾の問題

5-1 学校の問題

5-1-1 進学校の男女差

難関大学進学者が多いようないわゆる「進学校」と呼ばれる高校に入ることは、その後の進路選択に大きく影響するが、女子学生にとって入れる高校やそのための学習機会が男子学生と比べて著しく制限されていることが問題視されている。以下ではわかりやすい例をいくつか紹介しよう。

東京大学合格者数の高校別ランキング（2024 年度）				
	高校名	都道府県	合格者数	男子校
私	開成	東京	149	○
私	聖光学院	神奈川	100	○
私	灘	兵庫	94	○
国	筑波大学附属駒場	東京	90	○
私	西大和学園	奈良	71	
私	渋谷教育学園幕張	千葉	64	
私	桜蔭	東京	63	
公	日比谷	東京	60	
私	麻布	東京	55	○
私	海城	東京	49	○
私	栄光学園	神奈川	47	○
私	浅野	神奈川	45	○
公	浦和（県立）	埼玉	44	○
私	駒場東邦	東京	44	○
公	横浜翠嵐	神奈川	44	

①東大進学率上位校の男子校率

大学通信オンラインによると、2024年度の東京大学合格者数の高校別ランキングは以下のようになり、上位15校のうち10校が男子校となっている(参考文献17)。東京大学はあくまで難関大学の一例ではあるが、このような大学に行ける教育水準の学校に、女子学生が通える機会が圧倒的に男子学生と比較して限られていることがわかる。

②有名私立校の男女枠差

私立の教育機関では、入試の段階で学生が男子か女子であるかで大きく定員や合格最低点を操作していることが多く、特にハイレベルな競争が強いられるような有名私立学校においても見られる現象である。以下には、西大和学園、洛南高等学校附属学校、慶應義塾大学附属学校を例として挙げる。

西大和学園は奈良県に存在する近畿で最難関の一つの中高一貫私立校である。毎年多くの東大などの難関大に学生を輩出しているが、西大和学園も中学校の段階で男子180名女子40名と男女で定員数に4.5倍もの差をつけている(なお、高等学校においては割り当てなし男女計120名募集)(参考文献18)。

洛南高等学校附属学校については、募集定員において男女による異なる割り当ては行ってはいないものの、専願入試に限って合格最低点として男子は201点、女子は217点と、異なる基準を設けている。この結果、最終合格者は男子195名、女子95名と2倍以上の差がつく結果となった(令和6年度入試)(参考文献19)。

首都圏の私立中学受験でも同様の問題が指摘されている。女子学生の定員を制限する、女子の底点を高く設定する理由について、よく「女子学生の人数が増えすぎないように」と語られることが多い(参考文献20)。しかし、そのような懸念を持ちつつ、その制度を導入することで男子学生が女子学生よりも多くなっている現状を問題視しない学校の姿勢には疑問が拭えない。

慶應義塾大学の国内附属学校の男女別定員		
	男子定員	女子定員
幼稚舎	96	48
慶應義塾横浜初等部（共学）	66	42
慶應義塾普通部（男子校）	180	ND
慶應義塾中等部（共学）	120	50
慶應義塾女子高等学校（女子校）	ND	70
慶應志木高等学校（男子校）	190	ND
慶應義塾高等学校（男子校）	330	ND
慶應湘南藤沢中等部（共学）	割り当てなし	
慶應湘南藤沢高等部（共学）	割り当てなし	
合計	982	210

出典：いずれも参考文献21～28の募集要項より自主作成

これらの公平性の問題は、以上に挙げた教育機関が私立であるという理由だけで棚上げできる問題ではない。特に各教育機関が負う社会的責任や影響力を自覚しているのなら、なおさらである。公平な競争と信じている学生たちの努力を裏切るような制度は早急に改善されるべきである。

有名私立大学である慶應義塾大学の国内附属学校は小学校にあたる幼稚舎から始まり数多存在するが、男子校が多く、共学校であっても男子の定員より女子の定員が半分近く少ない事例がほとんどだ。その差は合計すると歴然で、男子の定員は幼稚舎から各高等部を合わせて982名に対し女子の定員は210名に留まる。これにより、最終的な慶應義塾大学への内部進学者の男女比も大きく偏ることとなる。

出典：大学新聞、大学通信ONLINE、東京大学2024年 大学合格者 高校別ランキング。

③公立高校の男女別学

また、北関東地方を中心に地方公立進学校が男女別学である事例が少なくない。たとえば群馬・埼玉・栃木などが挙げられ、現在共学化の議論が進められている。それと対置して女子校も存在するため公平性に問題はないように思われるが、実際には学校の歴史背景や学業・進路指導における校風の違いが大きく、例年進学実績において男子校が女子校を上回っている。より高い目標を持ちより高い志を持つ学友と切磋琢磨する環境で学びたいと思うのは男女を問わず当たり前のことだ。性別による天井なしに自分の学力に合った学校選びができる環境を整えることは急務である。

下表は、公立高校が男女別学となっている県において、県トップの進学校（男子校・女子校）の東大合格者数を比較したものである。男子校に比べて、女子校の東大合格者数は著しく少ないことが分かる。（なお、埼玉県については、共学の公立高校も存在するため、注意が必要である。しかし、共学校の男女合計の進学実績に比べても男子校の進学実績は圧倒的であり、そこに入学できない女子学生の不利益は依然として大きい。共学校の男女別進学実績は公表されていないため、表には含めていない。）

北関東地方の公立男子校及び女子校の東大合格者数			
	群馬県	埼玉県	栃木県
公立男子校トップの 進学実績（東大合格者数） （R3-R5）	23	109	44
公立女子校トップの 進学実績（東大合格者数） （R3-R5）	9	12 （ R4-R6 ）	9

出典：参考文献35～40公式進学実績データより著者自主作成

5-1-2 高校の設備における男女差

難関私立高校の中には、寮を併設している学校も少なくない。偏差値の高い私立中高には、全国から学生が集まるためである。しかし、その学生寮は、多くが男性寮であり、女子学生は入寮することができない。

寮のある共学私立中高一貫校のうち、洛南高校・西大和学園・久留米大附設・福岡大学付属大濠中学校・土佐高校・白陵高校などは男性寮しか有しておらず、女子学生は入寮することができない。これらの、男性のみ寮がある共学校は高偏差値帯に多く存在しており、地元で難関校がない等の理由から遠方の高校に通いたい女子学生の選択肢を狭めていると考えられる。

5-2 進学塾の問題

子どもや学生の進路選択には、彼ら彼女らが通う小・中・高校だけではなく学校外の学習の場として「塾」の存在が大きく存在する。

学校とは異なり、「成績を上げる」「合格実績を上げる」ことに主眼が置かれる学習塾においては、より残酷な男女格差が存在する場合がある。

特に中学受験で日本有数の合格実績を持ち、5万人弱の生徒を抱える、ある大手の進学学習塾には、「女子学生が進学できる難関校が少ないから」という理由で、いわゆる選抜クラスに入るための条件として、女子に男子よりもはるかに高い成績を課すものが未だに存在する。実際に、選抜クラス的女子比率は男子比率に比べて顕著に低く、男子数名の中に女子一名といった構成の学年も多い。

しかし、このような学習塾の経営方針が、真に「学生のため」「合格実績向上のため」になっているのかには、大きな疑問が残る。百歩譲って難関高校の女子学生の多くが既にその塾の生徒で占められているならまだしも、そうでないのにも関わらず事前に自ら高い質の教育から女子学生を閉め出し、成長機会を奪うことは、学生の進路選択のみならず塾の合格実績にも損失が生じることになる。

加えて、そもそも子どもたちが学ぶ理由はその先の受験のためだけではない。学び競う楽しさや自己実現のために学ぶ子どもも少なくないだろう。受験という大人の都合で教育・成長機会を男女で分けて狭めてしまうのは不当である。

事例の紹介

著者の一人である学生Aは、大手進学塾にて講師をしているが、高校受験における選抜クラスに入るために女子生徒が男子生徒よりも二桁以上高い点数を取ることを求められている。4年間バイトをする中で、本来なら選抜クラスの男子生徒より点数が高いのにも関わらず通常クラスに落ち、自分のレベルに合わない授業を半年にわたって受ける女子生徒を何人も見てきた。

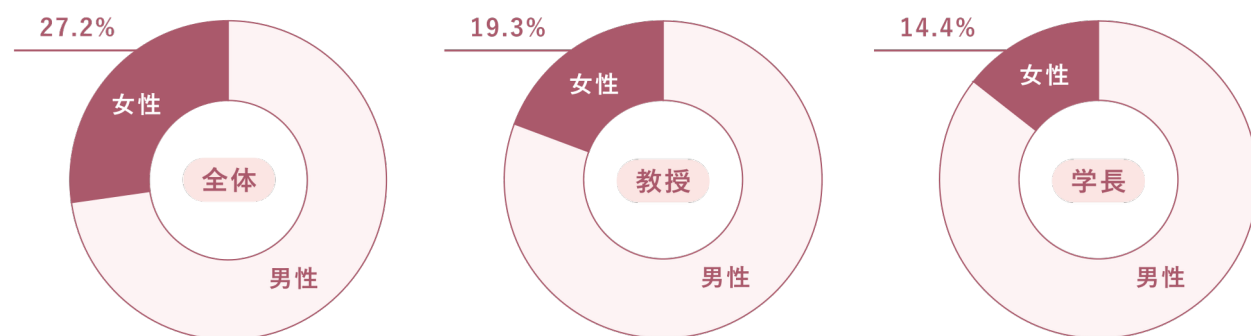
Aが女子生徒にこっそりと話を聞くと、「どうして選抜基準が女子の方が高いんですか。」「そもそも入れる高校が男子より少なすぎるのっておかしくないですか。」と、女子生徒は普段こぼさない不公平感を口にした。

6. 大学の問題

6-1 大学教員の男女差

大学教員は、学部女性比率の低さからも伺える通り、非常に女性割合が少ない。大学の女性教員比率は 27.2% である（2023 年）が、若手ポストに比べて上位職になるほど女性割合は下がり、教授 19.3%、学長 14.4% である。

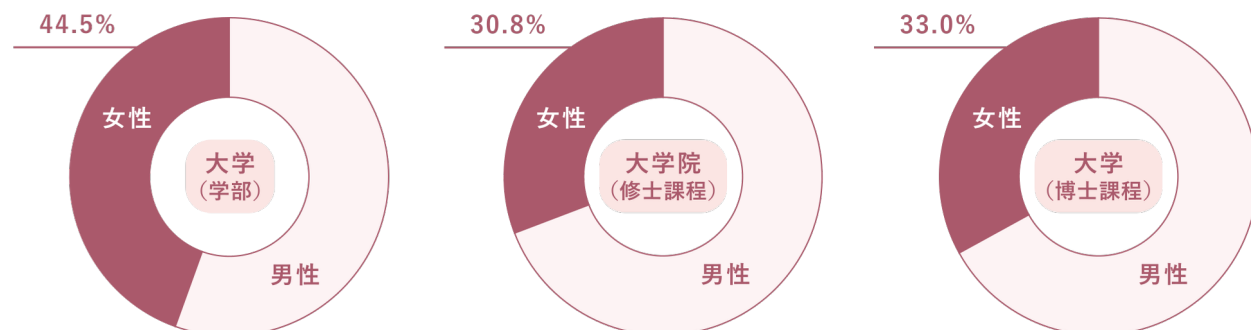
職名別・大学教員の男女比



出典：文部科学省、学校基本調査（2023 年度）

これは、難関大学の学部女性割合が低いこととも密接に関連していると考えられる。また、高等教育段階の女子学生の割合は、大学（学部）44.5%，大学院（修士課程）30.8%，大学院（博士課程）33.0% となっており（平成 28 年度男女共同参画白書）、修士課程進学の際にハードルがあることが伺える。

高等教育段階の学生の男女比

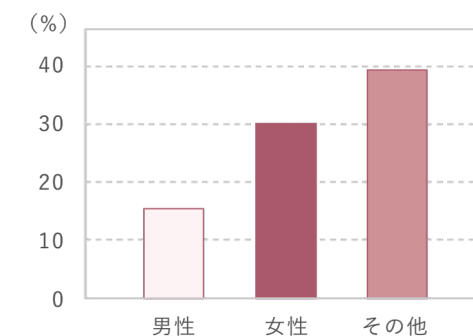


出典：内閣府男女共同参画局、男女共同参画白書（2016 年度）

6-2 大学におけるハラスメント被害

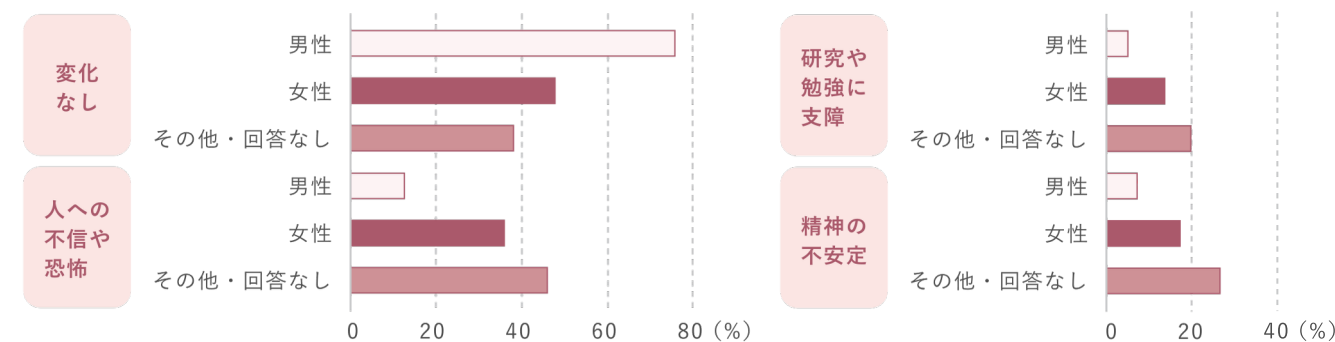
2020 年度「東京大学におけるダイバーシティに関する意識と実態調査」によると、女性や性別「その他」の者はハラスメントの被害経験のある割合が男性よりも高く、何らかの被害経験のある割合は男性では 15.3% であるのに対し、女性では 30.1%、性別「その他」の者では 39.4% であった。特に女性割合の低い学部・研究科に所属している女性は、ハラスメント経験のある確率が高い。また、女性や性別「その他」・回答しない・無回答の者ではハラスメントが大学生活に影響をもたらす可能性が男性より高かった。

セクシュアル・ハラスメントの被害経験がある学生の分布



出典：東京大学におけるダイバーシティに関する意識と実態調査（2020 年度）

セクシュアル・ハラスメントが大学生活にもたらす影響の分布



出典：東京大学におけるダイバーシティに関する意識と実態調査（2020 年度）

女性割合の低い学部・研究科に所属している学生がハラスメントを受けやすい現状は、女子比率の低い大学や学部に進もうとする女子学生にとってハードルとなり、結果的に女子比率向上の壁となっているとも考えられる。

7. その他の問題

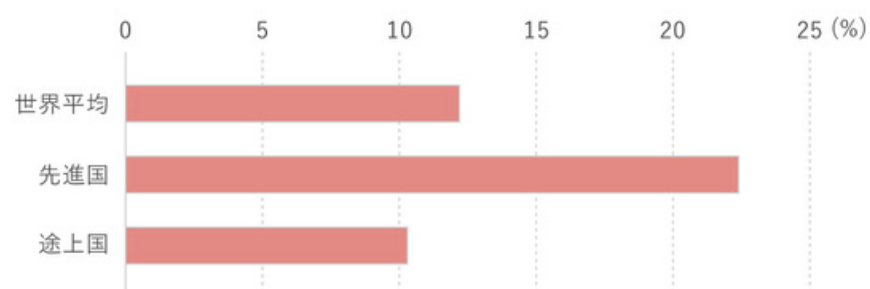
本レポートでは、大学進学をめぐるジェンダーギャップについて、ステレオタイプや教育機関・家庭における問題などの観点からまとめている。しかしながら、大学進学をめぐるジェンダーギャップについては、そのような分類には当てはまらない論点や、直接的ではないものの学生のジェンダー観や進路選択に影響を与えうる論点も存在する。8章では、「生理」および「学生寮」に関する問題について、そして進路選択に間接的な影響を与えうる「隠れたカリキュラム」「教員の男女比」について詳説する。

7-1 生理について

女子学生にとって生理は大学受験への大きな影響要因の一つである。受験時、学生は体調や精神的な影響を大きく受けやすい環境におかれており、生理期間が重なることで特有の体調不良や精神的な負担が生じやすくなる。頭痛、腹痛、倦怠感といった身体的な症状に加え、集中力の低下やストレスが生じ、試験当日に最高のパフォーマンスを発揮することが難しくなることがある。実際に健康情報サービス『ルナルナ』が中学校高校に通う女性1,660名に行った調査によると、1.腹痛・腰痛 2.経血の多さによる不快感 3.集中力の低下 4.イライラ 5.頭痛を経験する中高生の数は実に8割にのぼる。

生理期間のコントロールには、低用量ピルの活用などの対策方法が挙げられるが、日本での低用量ピルの普及率は2022年時点で6.1%と非常に低い。しかし、世界に目を向けると、この現状は決して当たり前ではない。多くの先進国では1990年代から低用量ピルの普及が進み、女子学生が自ら生理をコントロールし、テスト期間や受験期に最良の体調で臨むことが可能となっている。

避妊方法としての低用量ピルの服用率
(婚姻・同棲関係にある15~49歳女性)



出典：スマルナ.スマルナホームページ. PILL FACTBOOK.

低容量ピルの平均服用率は全世界で12.2%、先進29国に絞ると22.4%であり、日本はピルの社会実装が著しく遅れている国だと言える。

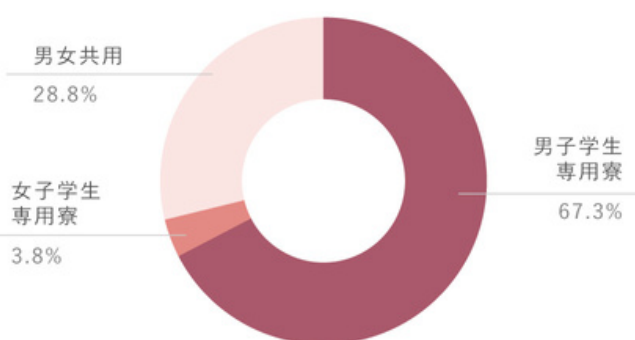
諸外国のように女子学生が自分の身体を自由にコントロールする権利を行使できる環境を整えることが、男女間の教育における身体的不均衡を是正する可能性がある。

7-2 大学学生寮について

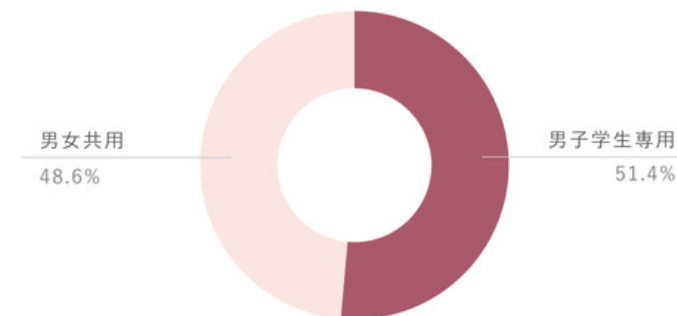
地元から離れた大学に進学することを選択したい学生にとって、大きな問題となるのが一人暮らしの家賃・光熱費等である。特に、地方から首都圏の大学に進学する場合、首都圏の地価は高騰しており、高額な家賃を求められるケースが多い。そのような困難を抱える学生に対して、安全で安価な住居を提供するのが全国35道府県が東京近郊に設置する「県人寮」である。

首都圏での平均家賃は食費・通信費・光熱費は除いて81001円（平成30年住宅・土地統計調査）と非常に高額であるのに比べて、52の県人寮の平均家賃は32250円と非常に安価である。しかし、そのうち18府県が設置する県人寮が男性専用となっており、女子学生にはその門戸が解放されていない。全国の県人寮のキャパシティは、女子学生受け入れ門戸数689名に対して男子学生受け入れ門戸数2627名となっており、深刻な男女差が存在する（特定非営利活動法人ハッシュタグYourChoiceProject「県人寮への女子学生受け入れに関する実態調査レポート」より）。

52 県人寮の内訳



県人寮を保有する35自治体の女子学生受け入れ状況



事例の紹介

東京大学のある女子学生は、石川県の県人寮が女子学生の受け入れをしておらず入寮を断念したという。賃料の安さと安全性、地元の友人や知り合いがいて安心であるなどの観点から、かねてより県人寮への入寮を希望していたが、友人の男子学生は入寮する傍ら、自分は住まい探しには特段苦労したという。

7-3 教員の男女比について

教員の女性比率は、幼稚園から高校まで段階が上がるほど低くなっており、令和5年度の高校の女性教員割合は33.4%である。また、校長の女性割合はより低く、最も高い小学校でも23.4%、高校では8.4%である。

児童が一番身近に触れる「社会」である学校で、管理職やリーダーに相当する女性の割合が非常に低い現状は、児童（生徒/学生）に「リーダーは男性になるもの」というステレオタイプを与える可能性が懸念される。

初等中等教育期間の教員の男女比

区分	教員数（本務者）（人）		
	計	うち女性	女性比率（%）
小学校	(857)	(1,146)	(0.2)
	424,297	265,522	62.6
中学校	(137)	(733)	(0.3)
	247,485	110,280	44.6
義務教育学校	(1,080)	(619)	(0.6)
	7,448	4,035	54.2
高等学校	(-1,488)	(195)	(0.3)
	223,246	74,615	33.4
中等教育学校	(80)	(57)	(1.1)
	2,829	1,009	35.7
特別支援学校	(1,053)	(810)	(0.2)
	87,869	55,160	62.8

出典：文部科学省. (2023, December 20). 学校基本調査－令和5年度　結果の概要－

7-4 隠れたカリキュラムについて

学校教育においては、かねてからジェンダースtereotypeを強化する「隠れたカリキュラム」の存在が指摘されてきた（下表）。特に縦の列を意識して表を読むと、指導者が意識的であれ無意識であれ、①不必要な二分法②性別役割③上限関係④機会の不均等を学生に押し付けていることがわかる。学生の能力や意欲をジェンダースtereotypeによって阻害しないような、個人個人の良さを発揮し伸ばすことができる環境が望ましい。

例示されているのは、どれも「男子が上、女子が下の掲示」「さん・くんの呼称」などすぐに改善できるものも多い。各教育機関には、ジェンダー平等の観点から意識的に日頃の指導のあり方を見直していただきたい。

ジェンダースtereotypeを強化する「隠れたカリキュラム」

	① 不必要な二分法	② 性別役割	③ 上下関係	④ 機会の不均等
教室環境	掲示物の男女別掲示		男子が上・女子が下の掲示	
学級生活	男女別名簿／男女別整列	係・委員会などでの役割分担	男子の意見がとれる教室	発言の機会
学校施設・慣行	入学式・卒業式等の座席の二分／出席・成績・保健等の男女別統計	行事での役割分担	生徒会の役員（長は男子、副は女子）／表彰代表は男子	入学者の男女別合格枠
教師と生徒の関係	さん・くんの呼称／男子は・女子はと一括りにした言い方	役割の男女別人数の指示／教科担当についての決め付け	副や補助の女子への割り当て	男子と関わる時間が長い
生徒間の関係	休み時間は男女に分かれる	実験の操作は男子、記録は女子	実験・司会などの役割担当	校庭・運動場の占有率
教師間の関係	男女別教員名簿	校務分掌・教科担当の男女による偏り	女性は主任や部長にしない	管理職への登用
保護者・地域との関係	学用品の男女色分け購入	日頃のしつけ・挨拶・不登校は母親の責任とみなす	父親名の保護名欄	就職時の男女で異なる採用数

出典：村松泰子「学校教育とジェンダー：研究と実践の動向」

おわりに

本白書は、大学進学における日本のジェンダーギャップの実態とその背景要因を明らかにし、解決への道筋を考えるための基礎資料として提示するものである。日本の大学進学には依然として顕著なジェンダーギャップが存在し、都道府県別の進学率や難関大学での女子学生比率の低さがその一例である。また、理工系や経済系分野での女子学生の割合が低く、学部選択における性別による偏りも続いている。

本白書で取り上げた課題の中には、制度上の欠陥として見直すべきものも含まれる。たとえば、大学進学の際に「浪人ができる」ことが有利とされる現行の受験制度には、経済的余裕やジェンダー意識が大きく影響し、不平等が生じている。学生が不合格のリスクを過度に抱えることなく、浪人という選択肢の有無にかかわらず志望校を決定できる環境が必要ではないだろうか。

教育は単なる経済的な将来の成功や社会的地位のためにあるわけではない。大学に進学すれば良いというわけでもない。しかし、目標を持って学びたいと願う人々が、不当な差別的構造や誤ったステレオタイプによって意欲を削がれることのない環境を整えることは、教育の重要な役割である。この点で、女子学生たちは幼少期から繰り返し意欲を冷却されてきた実態があり、それが将来の選択肢を狭める要因となっている。

現在提案されている女子枠制度やその他の解決策について議論するにあたり、まず本白書を通じて事実に基づいた理解を深め、議論の基盤としていただきたい。

すべての学生が性別に関係なく平等に学び、成長できる教育環境の実現に向け、今後も調査や提言活動を続けていく。本白書で解明しきれていない課題や、データが不足している分野も多く存在するため、さらなるデータ収集や実態調査を進め、教育現場の改善に向けた取り組みを加速させていく所存である。この問題は私たちだけの取り組みでは解決できない。教育に関わるすべての人にとっての課題として、共に考え、行動していただけることを願う。

参考文献一覧

1. Kusum kali pal, Kim piaget, & Saadia zahidi. (2024, June 11). *WORLD ECONOMIC FORUM*. Global Gender Gap Report 2024. <https://www.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2024/>
2. 文部科学省. (2023, September 25). 文部科学省. 中央教育審議会総会(第137回)【資料1-3】参考資料. <https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000255573.pdf>
3. 東京大学新聞. (2024, March 10). 東大新聞オンライン. 東大24年度一般選抜、2993人合格 春合格の女性割合は減少の20.6%. https://www.todaishimbun.org/goukakuhappyo_20240310/
4. 大学改革支援・学位授与機構. 大学改革支援・学位授与機構. 大学基本情報 2023 (R5) . <https://portal.niad.ac.jp/ptrt/r05.html>
5. 文部科学省. (2023, December 21). 文部科学省. 学校基本調査ー令和4年度結果の概要ー. https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00007.htm
6. Cardwell, mike. (1999). *The Dictionary of Psychology*. Fitzroy Dearborn, Chicago, London.
7. 男女共同参画局. (2022, November 8). 男女共同参画局. 令和4年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究. https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r04/02.pdf
8. 株式会社ベネッセコーポレーション・#YourChoiceProject共同調査「保護者1800人へのアンケート調査」
9. Unfried, Alana & Faber, Malinda & Wiebe, Eric. (2014). *Gender and Student Attitudes toward Science, Technology, Engineering, and Mathematics*.
10. 横山広美. (2022). なぜ理系に女性が少ないのか. 幻冬舎新書.
11. 三菱UFJリサーチ&コンサルティング. (2022, March). 男女共同参画局. 女子生徒等の理工系分野への進路選択に おける地域性についての調査研究. https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r04/02.pdf
12. 文科省：「学校基本調査(平成30年), 文科省調べ[各県(学部の所在地による)に所在する大学の入学定員より文科省作成都道府県別大学進学者収容力「対大学進学希望者」より. 参考資料集. <https://www.mext.go.jp/content/000141270.pdf>
13. 大神田麻子, 孟憲巍, 鹿子木康弘, 浦上萌, 山本寛樹, & 森口佑介. (2022). Gender Stereotypes about Intellectual Ability in Japanese Children(日本の子どもにおける知的能力に関するジェンダーステレオタイプ). *Scientific Reports*, 12. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-20815-2>
14. Plan international. (2022, April). PLAN INTERNATIONAL. STEPPING OUT OF THE GENDER BOX 性別にとらわれず自由に生きるために「日本の高校生のジェンダー・ステレオタイプ意識調査」. https://www.plan-international.jp/news/info/pdf/0415_Gender_stereotype_report_Final.pdf
15. Daniela s. jopp, Seojung jung, Amanda k. damarin, Sheena mirpuri, & Dario spini. (2017). Who Is Your Successful Aging Role Model? *The Journals of Gerontology*, 72(2), 237–247.

16.#YourChoiceProject. (2023). #YourChoiceProject. なぜ、地方の女子学生は東京大学を目指さないのか【2023年度調査結果】.
<https://yourchoiceproject.com/column/pressrelease2023>

17.大学新聞. 大学通信ONLINE. 東京大学2024年 大学合格者 高校別ランキング. <https://univ-online.com/success/tokyo/u126/>

18.西大和学園中学校. (2024, August 29). 西大和学園中学校・高等学校. 入学試験について. https://www.nishiyamato.ed.jp/assets/pdf/admission/ee2024/jh_honkou.pdf

19.洛南高等学校附属中学校. 学校法人真言宗洛南学園 洛南高等学校・洛南高等学校附属中学校 洛南高等学校附属小学校. 中学校入試情報. https://www.rakunan-h.ed.jp/publish/wp-content/uploads/2023/07/2025_rakunanjHS-youkou.pdf

20.富田すみれ子. (2021, July 27). BuzzFeed News. 「成績順にすると女子が圧倒的に多くなってしまう」共学の私立中学受験、女子が不利になるのはなぜ？.
<https://www.buzzfeed.com/jp/sumirekotomita/chugaku-jyukuen-1?bfsource=relatedmanual>

21.慶應義塾幼稚舎. (2024, August 30). 慶應義塾幼稚舎. 入学試験概要.
<https://www.yochisha.keio.ac.jp/admissions/overview/>

22.慶應義塾横浜初等部. 慶應義塾横浜初等部. 募集概要. <https://www.yokohama-e.keio.ac.jp/admission/index.html>

23.慶應義塾普通部. 慶應義塾普通部. 受験生の方へ 入学試験 募集要項について.
<https://www.kf.keio.ac.jp/admission/examination/>

24.慶應義塾中等部. 慶應義塾中等部. 2025年度生徒募集について.
<https://www.kgc.keio.ac.jp/nyusi.html>

25.慶應義塾女子高等学校. 慶應義塾女子高等学校. 入試概要(募集要項).
<https://www.gshs.keio.ac.jp/for-jukensei/nyushi-gaiyo.html>

26.慶應義塾志木高等学校. 慶應義塾志木高等学校. 2025年度入試概要.
<https://www.shiki.keio.ac.jp/exam/outline.html>

27.慶應義塾高等学校. 慶應義塾高等学校. 募集要項（2025年4月入学生）.
<https://www.hs.keio.ac.jp/exam/application.html>

28.慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部. 慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部. 入試情報.
<https://www.sfc-js.keio.ac.jp/exam/>

29.埼玉県教育委員会. (2024, October 25). 彩の国 埼玉県. 教育委員会トップ 公立高校のホームページ. <https://www.pref.saitama.lg.jp/e2201/school01.html>

30.内閣府男女共同参画局. 内閣府男女共同参画局ホーム. 男女共同参画白書 令和2年版.
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/html/honpen/b1_s05_00.html

31.東京大学. (2020, January 28). 東京大学ホームページ. 2020年度「東京大学におけるダイバーシティに関する意識と実態調査」報告書.
<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/actions/diversity-report-2020.html>

32.スマルナ.スマルナホームページ. PILL FACTBOOK. <https://smaluna.com/factbook/>

33.文部科学省. (2023, December 20). 文部科学省ホームページ. 学校基本調査ー令和5年度結果の概要ー.
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/2023.html

34.直井 道子, 村松 泰子. (2009). 学校教育の中のジェンダー 子どもと教師の調査から (1st ed.). 日本評論社. ISBN 978-4-535-56281-3

35. 群馬県立前橋高等学校ホームページ. 進路概況. <https://maebashi-hs.gsn.ed.jp/c742ab6580f9259fcc88ede222d96751/進路-1/進路概況>

36.群馬県立前橋女子高校ホームページ. 最近6年間の大学別合格者数. <https://maejo-hs.gsn.ed.jp/wysiwyg/file/download/23/4990>

37. 埼玉県立浦和高等学校ホームページ. 進路実績. <https://urawa-h.spec.ed.jp/全日制/進路指導/進路実績-1>

38. 埼玉県立浦和第一女子高等学校ホームページ. 合格・進学者数. <https://urawaichijo-h.spec.ed.jp/ichijo/result>

39. 栃木県立宇都宮高等学校ホームページ. 進路と進学. <https://www.tochigi-edu.ed.jp/utsunomiya/nc3/学校案内/進路と進学>

40. 栃木県立宇都宮女子高等学校ホームページ. 進路状況. <https://www.tochigi-edu.ed.jp/utsunomiyajoshi/nc3/トップページ/学校案内/進路状況>



#YourChoiceProject